

令和 2 年 5 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13166

研究課題名（和文）共創的芸術実践が効果をもたらす仕組みに関する社会学的・認知科学的研究

研究課題名（英文）A Sociological and cognitive scientific study of how co-creative art activities bring about effects

研究代表者

中村 美亜（Nakamura, Mia）

九州大学・芸術工学研究院・准教授

研究者番号：20436695

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は次の3点である。1）芸術活動は、何がよいかという基準があらかじめ定まっているのではなく、何がよいかを検討しながら何かを生み出すという作業であることが明らかになった。したがって、2）参加する人たちが、自分が生かされるための創造の方法を「創出」しながら、「語りなおし」（自分を支えてきた物語を再編し、新しい自分を肯定的に位置づける新しい物語をつくること）ができれば、創造がエンパワメントへとつながることが示された。3）以上の知見をもとに、創造とエンパワメントが両立するためのファシリテーションやプロジェクト・デザインのモデル化を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

21世紀に入り、アーティストが一般参加者と作品やパフォーマンスを創造する共創的芸術実践の機会が飛躍的に増加した。しかし、従来の芸術学、アートマネジメント、文化政策の研究方法では、芸術実践が人に及ぼす効果やそのプロセスを明らかにすることができなかった。そこで、新しい文化社会学的方法で事例を分析し、認知科学的な知見を用いながら理論的検討を行うことで、これらの解明を試みた。また、本研究で得られた知見をハンドブックにまとめ、現場の実践家にも伝えた。

研究成果の概要（英文）：This study has explored the relationships between creativity and empowerment, focusing on the concepts of “generative creation” and “retelling.” As a result, it has been cleared that that creativity and empowerment coexist when creation occurs through a “generatively created” method that maximizes the potential of each participant and produces “retelling.” Given this, the study has created a model of facilitation and project design for the co-creative arts activities that ensure the link between creativity and empowerment.

研究分野：芸術社会学

キーワード：共創 芸術活動 エンパワメント 社会包摂

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り、アーティストが一般参加者と作品やパフォーマンスアーツを創造する共創的芸術実践の機会が飛躍的に増加した。しかし、芸術研究の多くは、美術・音楽等の分野ごとに、作品理解を中心に行われているため、人間と音楽プロセスについて説明をすることができずにいる。一方、アートプロジェクトの効果や評価に関する新しい研究も、マネジメントや経済的側面に偏りがちで、芸術実践が人に及ぼす効果やそのプロセスについては議論があまり進んでいない。

だが、近年の認知科学の研究では、芸術体験における知覚や認識のプロセス、情動や共感のメカニズムは芸術の分野を超えて共通であることが指摘されている。加えて、文化社会学では、芸術作品を「触媒」(mediation)、芸術実践を「行為体」(agency)と捉えることで、人間がそこにとどのような意味づけを行い、どう活用しているかが明らかにされつつある。共創的芸術実践はこれまで、固有のコンテクストに大きく依存するため、記述や評価は困難であるとされてきたが、これらの研究方法を応用すれば、時間・空間的制約やジャンルを超えて、実践の成果やノウハウを共有する仕組みを確立することは可能であるように思われる。

筆者はこれまで、セクシュアル・マイノリティや東日本大震災後の音楽活動に関する研究を通じて、「音楽の力」と言われるものの実体について検討を重ねてきた。音楽を「音による仕掛け」と捉え、それを仕掛けとして機能させるために人間が何を行っているかを社会学的方法で調査・分析した結果、「音楽の力」と一口に言っても、効果には、音響心理学的次元に関するもの、音楽への新たな意味づけに関するもの、共同での実践に関するものなど多岐にわたり、複数のパターンが存在することが明らかになった。同時に、これらのパターンが、認知科学における情動や共感のコミュニケーションに対する理解とも一致することがわかってきた。

以上のことから、認知科学と文化社会学を統合したアプローチで共創的芸術実践を検討することで、その独自の効果やそれが生み出される仕組みが明らかになると推測された。

2. 研究の目的

本研究は、関連の事例報告を収集・分析すると同時に、近年大きな発展を遂げている認知科学の成果と文化社会学の知見を統合的に活用しながら、個別の事例を詳しく調査することで、共創的芸術実践が個人や社会に効果をもたらす仕組みの理解を深めることを目的とした。特に実践に「参加」すること、芸術「表現」に携わること、成果が「表象」として社会に示されることによる効果を一旦分けて考え、概念モデルによって段階的に示すことで、共創的芸術実践を行う独自の意義や効果が生み出される仕組みを詳らかにすることを試みた。(ただし、実際に研究を進めていくと、「参加」「表現」「表象」の3分類は適切ではないことがわかり、修正することになった。)

本研究から導き出される概念モデルを活用することで、より効果的な実践の企画運営や評価検証ができるようになると同時に、日本独自の文脈で発展している共創的芸術実践を海外に紹介し、情報共有や文化交流を促進するきっかけを作ることでもできると思われる。

3. 研究の方法

本研究は、次のような相互に関連し合う、4つの異なるアプローチを用いて実施された。(1)芸術文化活動の役割や効果の分類、(2)特定の共創的実践プロジェクトの調査、(3)「共創」に関する理論的検討、(4)研究成果のモデル化と社会資源化。

(1)芸術文化活動の役割や効果の分類

当初の予定では、「既に公開されている各種の事例報告集から、アーティストが一般参加者と作品やパフォーマンスアーツを創造する共創的芸術実践を抽出し、傾向や特徴を分析する」としていたが、2016年の熊本大地震発生を受け、この地震に関連して行われた様々な芸術文化活動に関する情報収集に努めた。この調査は、筆者がこれまで行ってきた東日本大震災後の芸術文化活動に関する研究の延長線上にあるものでもあり、臨機応変に対応する必要があると考えた。収集された情報をもとに、分類方法について検討し、コードやカテゴリーの定義を行った。ここでの分類や定義は、以降の調査の指針となった。

(2)特定の共創的実践プロジェクトの調査

東日本大震災後に「オーケストラ FUKUSHIMA」などのプロジェクトを展開した音楽家、大友良英氏の共創的実践に関する調査を行った。2016年度は、宮古島などで行われた「アンサンブル・アジア」プロジェクト、2017年度は、札幌国際芸術祭における「さっぽろコレクティブオーケストラ」(SCO)のフィールドワークを実施した。SCOは、音楽経験や能力にかかわらず、小学生

から 18 歳までの誰もが参加できる即興音楽オーケストラである。学校で居場所を見つけにくい子どもや、発達障害を抱える子どもなども数多く参加していたが、目標はあくまでコンサートを成功させることで、「音を生き生きとさせる」ことだった。実際、ワークショップ、コンサートのプログラミング、ファシリテーションでは、「音を生き生きとさせる」ために何ができるかが徹底して追求されていたが、この調査からは、「音を生き生きとさせる」という芸術的な価値を高める行為が、「子ども達が生き生きと振る舞えるようになるようにする」という社会福祉的な価値を高める行為と密接に結びついていることが明らかになった。

(3) 「共創」に関する理論的検討

「共創学会」が 2017 年 4 月に発足した。年に 3 回開かれる研究会や年次大会への参加を通じて、共創についての理解を深めていった。共創というのは、単に複数の人がいっしょに創造ことを意味するのではなく、非言語の身体的コミュニケーションがのびのびと行われる中で、自分が能動的に動いているのか受動的に動いているのかがわからなくなる状態において、自分のものとも他人のものとも判然としない新しい何かが生み出されていく状況と暫定的に定義できる。共創的芸術実践では、一般の参加者が自分のやりたいようにすることができ、かつ他の人に対しても制約をかけず、誰もがやりたいようにできる状態が確保され、その結果、みな協働して新しい表現を生み出すのに携わることができる状況をいかにデザインできるかが鍵となることがわかった。

(4) 研究成果のモデル化と社会資源化

上記のような調査に加え、文化庁と九州大学の共同研究「文化芸術による社会包摂の在り方」（「文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業」の一環）と連携し、省庁自治体職員、事業実施団体・中間支援組織職員、個人事業主・アーティスト、専門家など 23 人にインタビュー調査を実施した。これらの成果をもとに、文化庁と九州大学の共同研究チームで議論を重ね、社会包摂に関わる共創的芸術実践をモデル化し、多くの人に活用しやすいデザインのハンドブックを作成した。

4. 研究成果

本研究を通じて、「アートで元気になった」などの言葉で表されてきた、創造とエンパワメントの関係が理論的に説明できるようになった。また、創造とエンパワメントを両立させるために必要なファシリテーションやプロジェクト・デザインの方法についてもモデル化することができた。

(1) 創造とエンパワメントの関係について理論化

芸術家と一般の人が共同で行うアートプロジェクトは、しばしば「共創」と呼ばれ、参加する人たちをエンパワメントするとされている。しかし、「共創」と一口に言っても、その共同の形態はさまざまである。そこで本研究では、まず複数の人たちが関わる芸術活動における創造への関わり方やプロセスを再考し、整理した。その上で、そこから抽出された、「創出」と「語りなおし」という概念に着目し、創造とエンパワメントの関係を探った。

その結果、芸術活動においては、何がよいかという基準があらかじめ定まっているのではなく、何をつくるかを考えながら、同時によいとされる基準も考えるということが示された。創造するものだけでなく、最善の方法も一緒に「創出」する必要があるのである。ただし、一般的に「芸術活動」と言われているものがつねに「創出」を伴い、中動的な現れによっているわけではないことも確認された。一方、何がよいかを検討しながら何かを生み出すという作業は、「語りなおし」の契機ともなることが明らかになった。参加する人たちが生かされるための創造の方法を「創出」し、そこで「語りなおし」が生じる環境を整えることで、創造とエンパワメントが結びつく可能性は高まる。創造とエンパワメントは、二律背反ではなく、両立しうるものなのであることが示された。

以上については、『共創学』に掲載された論文「芸術活動における共創の再考：創造とエンパワメントのつながりを探る」において詳しく論じられている。

(2) 社会包摂につながる芸術活動のモデル化

これは、端的にポイントを述べるなら、多様な人たちが共創する芸術活動では、誰かが優位にある関係を作らないことが重要である。「マジョリティ」と「マイノリティ」に分けられる場合でも、両者が直接対話する機会をつくること、目的達成のためには計画変更をいとわないこと、展示や上演のやり方を工夫することが重要である。

共創的芸術活動については、「芸術の質は問わなくていいのか」という問いがしばしば投げか

けられる。しかし、ここで言われる「質」は、芸術の特定のジャンルの中での「質」に過ぎない。それは、そこに属す人には重要でも、そうでない人にはあまり意味のないことだ。重要なのは、むしろ「この活動に関わる人たちにとって大切にしたい芸術の質とは何か」ということであり、あるジャンルの専門家とそうでない人がいっしょに活動をするのであれば、その人たちの中で大切にしたい芸術の質が何かを考え、その質を高めることである。

以上については、共編著『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』において丁寧に記述されている。また、モデル化の経緯については、『文化政策研究』に掲載された論文「政策と実践をつなぐ中間言語-『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』の作成」にまとめている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中村美亜	4. 巻 1
2. 論文標題 芸術活動における共創の再考 創造とエンパワメントのつながりを探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 共創学	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村美亜	4. 巻 12
2. 論文標題 政策と実践をつなぐ中間言語 『はじめての "社会包摂×文化芸術" ハンドブック	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文化政策研究	6. 最初と最後の頁 20-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mia Nakamura	4. 巻 -
2. 論文標題 Music Sociology Meets Neuroscience	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Oxford Handbook of Music and the Body	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/oxfordhb/9780190636234.013.6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Mia Nakamura, Hazuki Kosaka	4. 巻 -
2. 論文標題 Facilitation-Based Distributed Creativity: The Inari Chorus Performance at the Itoshima International Art Festival	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Creativity in Music Education	6. 最初と最後の頁 137-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.1007/978-981-13-2749-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Mia Nakamura
2. 発表標題 Musical cocreation for diverse participants: How could it be both artistic and inclusive?
3. 学会等名 Special Research Project, Performing Arts and Conviviality, Preparatory Session (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mia Nakamura
2. 発表標題 Dual Assessment for Collaborative Artistic Activities Fostering Inclusive Culture
3. 学会等名 International Conference on Cultural Policy Research (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 中村美亜
2. 発表標題 社会包摂と文化芸術をめぐる論点整理
3. 学会等名 日本文化政策学会
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 中村美亜
2. 発表標題 共創的な表現の場づくりに必要な条件を考えるための理論的考察,
3. 学会等名 共創学会
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 中村美亜
2. 発表標題 さっぽろコレクティブ・オーケストラにおける共創ファシリテーション
3. 学会等名 共創学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村美亜
2. 発表標題 文化事業における価値創造の評価
3. 学会等名 文化政策学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mia Nakamura
2. 発表標題 Articulating the Processes and Social Effects brought forth by Socially Engaged Music-Making Projects
3. 学会等名 2nd Symposium on Social Impact of Making Music (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mia Nakamura
2. 発表標題 The Otto & Orabu Ensemble: Facilitation-based Distributed Creativity in Japan
3. 学会等名 Music Composition as Interdisciplinary Practice (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 九州大学ソーシャルアートラボ編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 240
3. 書名 ソーシャルアートラボ	

1. 著者名 文化庁×九州大学共同研究チーム編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 九州大学ソーシャルアートラボ	5. 総ページ数 68
3. 書名 『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----